別紙２

第１回広島市平和文化のまちづくり懇談会　議事（要旨）

⑴　説明事項

ア　佐々木　亨委員提言（広島のまちを「エコミュージアム」に見立て、「ナラティブ」を紡ぎ出す）

佐々木委員

この懇談会での議論の対象は、資料館の混雑により「ヒロシマの心」に触れる時間の確保が難しくなる中、来広者に平和を発信し続けるためには、資料館に限らずまちづくり全体で何を目指すべきか、また「ヒロシマの心」を来館者への共感の輪として広げるにはどうすべきか、の二つがあると解釈した。そこで、一つ目については「エコミュージアム」の考え方、二つ目については資料館での体験を言語化する有効な手段として、来館者が生み出す「ナラティブ」について提言する。

１点目の「エコミュージアム」は、地域全体をミュージアムとみなし、地域に点在する自然、歴史、文化に関する遺産や資料を、現地にとどめたまま保存・活用する点、かつ、面的に広がるため、地域住民の参加・協力が不可欠である点に特徴がある。この構想は、地方の文化の再確認と中央集権への反対などの観点から 1960 年フランスで生まれ、日本でも 1986 年以降博物館学の一つのジャンルとして認められている。「エコミュージアム」の要素としては、中核のミュージアムである「コア」、その周辺の自然、文化、産業などの遺産を展示する「サテライト」、「コア」と「サテライト」をつなぐ、または「サテライト」周辺の様々な遺跡、史跡などをつなぐ「ディスカバリートレイル」がある。

北海道の北広島町では、エコミュージアム構想が以前から盛んで、「サテライト」としては、島松駅逓所がある。これは、明治時代の宿泊や人馬の確保など輸送の便を図るための駅で、その周りの史跡などを見て回るツアーがある。駅逓所付近には「エコミュージアムセンター新地の駅」という「コア」があり、その周辺の駅逓や工業団地、開拓記念公園などを巡る散策ルートがある。このように、生活者、来訪者が行政と関わり、一緒になって運営・保存していく点に大きな特徴がある。この考え方を広島市に適用すると、資料館が「コア」、本川小学校などは「サテライト」、それを結ぶ形で、被爆樹木や記念碑、慰霊碑などを活かして一つの発見の物語を作る、ことが考えられる。

もう一つの「ナラティブ」は、自身の過去の経験に、新たなエピソードが加わって、経験が再構成され、新たに更新された物語を作っていくことと定義される。例えば、被爆の実相についても、資料館の展示や被爆者の話等から、自らの認識と異なる事実が分かれば認識が変わり、本を読んでまた変わり、というように自分の中で経験が再構成されていく行為を「ナラティブ」という。映画「Love Letter」でデビューした岩井俊二監督が、雑誌「BRUTUS」で「観た人それぞれの心に残ったものを“作品”と呼びたいし、そうであってほしいと思っています。私が生み出したものが１つでも、１万人が観たら１万通りの作品がある。」とおっしゃっている、その「作品」がまさに「ナラティブ」である。博物館でも同じで、学芸員が展示を通してストーリーを提示しても、来館者によって異なる受け止め方がされるし、来館者一人一人が自分の中で作品を再構成する。

ナラティブに注目し始めたのは、ある美術館で来館者へのインタビュー調査を行った際、作家の過去の思いや時代背景を想像し、自らの体験と重ね合わせたい、という来館者のニーズがあることが分かり、ナラティブを求める人がいるということでは、と考えたことにある。ナラティブは、来館者が、言語化し、体験を自分ごと化して、自分だけの物語・作品を作ることであるため、展示を製作する学芸員と来館者は対等な関係となる。そう考えると、博物館は、来館者数や売上などで評価されがちだが、ナラティブづくりの前提となる、体験を言語化した受け入れ可能な物語を、いかにたくさん提示し、ナラティブを促進できたのかも評価されるべき、と思う。

最後に、以前資料館に来た際、偶然、一緒に入館した男性が見学後のノートに真剣に記入している後ろ姿を見た時に「きっと、これが彼にとって、自分が思ったことを言語化する『ナラティブ』そのものだ。」と思い、すごく印象深いものがあった。この経験も、自分の「ナラティブ」研究の原点だと感じている。

イ　西尾　一輝委員提言（インバウンドがもたらす広島の経済発展）

西尾委員

訪日客の活況が続く中、国は、訪日客 6,000 万人、消費額 15 兆円を目標としており、この達成に向けて広島も含めた地方分散や周遊観光の促進が必要だと認識している。本日は広島の現況を踏まえ、今後進むべき方向性について提言する。

まず、広島市の観光入込客数は、平成 26 年度から令和 6 年度、伸び率が約 1.2 倍で 1,434 万人、特に訪日客に限ると 251 万人、3.8 倍と著しく伸長している。広島市は欧米豪の訪日客が多いと言われており、訪日した欧州圏の方の約 4 割、米は約 1 割が広島を訪問している。一般的に、欧米の方は滞在日数が長く、訪問拠点から様々な目的地を周遊する傾向があり、その傾向は今後も継続すると考える。また、ある記事では、すでに豪・英からの訪日客にとっては、広島はいわゆるゴールデンルートに包含されているとの報告もある。25 年度の資料館の入館数は、過去最高の 258 万人、特に外国人は 94 万 6,000 人だが、欧米を中心としたピースツーリズムはますます伸長していくと考える。一方、資料館の混雑問題が顕在化し、十分に見学できないという声も多数出てきている。

インバウンドによる広島経済の発展への寄与としては、新規ホテルの開業計画は目白押しで、既存ホテルも稼働率が相対的に向上し、宿泊単価もアップしている。今後も、こうした旺盛な宿泊需要を見込んだ計画も増えていくと推察する。経済発展の裨益(ひえき)として、飲食や土産、公共交通機関の利用者も増えており、24 年は 740 億円が市内の外国人によって消費され、今後も、全体の GDP とともに市民所得を押し上げる要因になると考える。宿泊のインバウンド需要は非常に大きく、今後もホテルを誘致する動きは加速すると見込むが、最近は、ホテルとオフィスが複合した施設もスタンダードになりつつあり、ビジネスの人流創出とあわせた整備も可能だと思う。

続いて、広島のインバウンド需要をいかに域内で周遊させるか、これは業界としても非常に大きなポイントだと捉えている。中四国 9 県の優れたコンテンツをテーマで結び、新たな周遊観光を各所と連携して発信・提案していくことが重要で、そのためには、地域ごとの主役をまとめ上げ、相乗効果を広く享受することが必要となる。また、点在する観光地の周遊のための一次交通、地域での二次交通の整備も重要である。

ここで、広島の課題としては、インバウンドを通過型から滞在型へシフトし、いかに宿泊増加につなげるか、すなわち、平和記念公園、宮島に次ぐ滞在コンテンツを作り充実させることにより、滞在時間を延ばしていけるかが大きなポイントとなる。例えば、資料館をスタート地点に、平和を軸に市内外をどう周遊させるか、エリアをテーマでつなぎ、交通手段も勘案した周遊コースや受け皿等をどう整備していくか。

このような観点から、「平和の軸線」で、資料館から平和記念公園、ゲートパーク、ピースウイングなどへの周遊観光をどう促すか検討している。具体的には、広島ゲートパークの一角で、被爆の実相と広島の復興を体感できる VR コンテンツとして、少なくなっていく被爆者の生の声をアーカイブとした映像を、DX を使って見てもらう、といった新しい広島ピースツーリズムスタイルを提唱したいと考えている。また、修学旅行生には、ピースウイングで昼食を取ってもらい、オーロラビジョンで平和学習を行ってもらっている。さらに、ゲートパークの「プライド・オブ・ヒロシマ」には広島の復興を見てもらう素晴らしいコンテンツもあるので、「平和の軸線」上での分散化や周遊化をさらに図っていくことが必要だと考える。

最後に、持続可能な観光地を目指していくためには、市内の周遊促進を、エリア開発という観点も含め、短期、中期、長期の視点で検討していく必要がある。その際、広島駅から八丁堀・紙屋町への動線の開発、平和記念公園から平和大通り・比治山など、平和を起点とした地域ごとのコンテンツのテーマづくり、一極集中を回避しながら滞在時間を取ってもらえるクオリティあるコンテンツ開発や施設の充実を、バックキャストの視点で検討していく必要があると思う。

ウ　懇談会の議論の進め方（案）

事務局　資料 5 について説明

エ　平和文化のまちづくりの枠組み

事務局　資料 6 について説明

⑵ **審議事項**

平和文化のまちづくりについて

上田委員

私は被爆後の広島で、伝統文化の再構築に全力で取り組み、今日に至っている。今回の中長期のまちづくりというテーマに関して、文化の継承をする中で思うことを述べる。

まず、「歴史の空白は埋まる。」ということを申し上げたい。私は足掛け 30 年かけて広島城内の上田上屋敷の構成再建に取り組んだが、本格的な建物を再現復建すれば歴史の空白は埋まると実感した。すなわち、新たに伝統文化の拠点が確保されたことによって、被爆して何もなくなりゼロからのスタートとなってしまったという、ある意味での思考停止から脱することができた。

次に、広島は日帰りの観光客の率が高い点に関して話をする。私は広島での朝の食事の充実を推奨する。お茶の世界では、朝の茶会があるが、本当に朝ごはんや食材がおいしい。朝の食事は、広島の日常生活の体験であり、すごく大事だという気がしている。また、エリアを平和記念公園から、100 メートル道路沿いの紙屋町、広島城地域にも広げれば、資料館の混雑緩和にも役立つし、結果的に宿泊にもつながる。広島に行くとホテルやレストランの朝ごはんが美味しいというのは魅力的な響きがあり、具体性も大いにあるし、佐々木委員のエコミュージアムにもつながると思う。

次に、日本工業デザインの先駆者と言われた榮久庵 憲司（えくあん けんじ）氏について申し上げる。彼は、世界に普遍的に通る日本の都市は、東京、京都、広島との信念を持たれて、デザイン総研を国内に 3 つ立ち上げた。そうした一方で、広島は異質な面を持った都市とも言われる。その整合性を考えると、「平和都市」と「中四国中枢都市」は、なかなか一体になりにくいということだと思う。市が提唱している「平和都市」と「広島広域都市圏」について、「平和」を圏域内で共有できるテーマとするなど、まずは一体感を十分に出すような努力をした上で「中四国中枢都市」としないと、どうもこの「平和都市」と「中枢都市」というのは、戦後長い間、一つにはならない、と感じてきた。そのキーワードは、今、市が取り組んでいる「広島広域都市圏の強化」ではないかと思う。

被爆 81 年が経って、被爆者や戦後すぐに生まれた私どもの世代のような、死者の霊魂を体感する人は確実にいなくなっている。広島の平和学習は非常に大切だが、一方、毎日のように原爆に関する報道があり、若者の広島離れの原因の一つでは、という指摘もある。それでも平和学習の拠点という広島の役割は大切であり、今後、広島広域都市圏にもどう広げていくか、それを中四国にもどう広げていくのか、ということを乗り越えていかなければならない。その際、地域の歴史や文化、芸術文化活動を圏域の若い世代のバックボーンとして構築するという視点が、今後の平和学習の目的の一つになるのではないか思う。

岡畠委員

この度の懇談会は、被爆 80 年から 100 年に向けて、広島は何を訴え、発信していくのかを根底に、新しい発信のあり方を考えよう、という趣旨だと思う。広島は、それ以前の歴史もあるが、8 月 6 日の被爆、それ以降の放射線被害、そして今に至る復興という歴史がある。例えば、外国人が、何に一番心を揺さぶられているかというと、やはり被爆による特殊な被害は当たり前で、非常に恐ろしいものだが、同時にグランドゼロから始まった今の広島の姿を見て「こんなに素晴らしい街になったのか。」と非常に驚かれる。ということならば、今後も、原点となる被爆と放射線被害、それから復興の 3 点を軸にした発信に、より磨きをかけていかねばならない。

ただ、今までと違うのは、この復興をどのようにして、もう少し感じてもらうか、ということだと思う。私は現役の記者時代、ある大学の先生に「広島は歴史を刻む努力をもう少ししなさい。」と言われたことがあるが、それは、この広島という地に何が起きたのかを街の中に刻む努力をし、これだけの復興がなされたんだと感じてもらい、人間というものの素晴らしさを感じてもらうことであろう、と解釈している。佐々木委員のエコミュージアム構想として、資料館をコアとして、その周辺を整え、さらに発見の小径（こみち）を整えていく。これは非常に素晴らしい考え方だったと思う。この構想を軸として、新たに何ができるのかについて考えることが、一つの方法になると思う。

西尾委員の提言にあった、復興の歴史としての「プライド・オブ・ヒロシマ」について、例えば、資料館を訪れた方がそこへ行き、広島の復興の歴史、各企業の素晴らしい歴史を見てもらうような動線作りが、若干難しいなと感じている。しかし、私も何度も行ったが、広島の企業の素晴らしさ、復興に携われた人々の努力には頭が下がるので、充実できないかと考えている。例えば、現在のゲートパークが狭ければ、シャレオでの展示などはどうか。今、経営が難しい状況になっているが、原爆ドームとゲートパークの中間にもあり、お客さんを誘導することもできるのではと思う。こうした意見を含め、皆さんの知恵を懇談会でうまく掛け合わせていけば、面白いまちづくりができると思う。

最後に、まちづくりにおいては、インフォメーションが肝心である。今は、外国人や修学旅行生が来ても、どこに何があるか全く分からない人が多いと思う。今、各団体とも一所懸命、取り組んでいると思うが、もう少し普遍的な取組として行うべき。例えば「広島の歩き方」っていって「地球の歩き方」の広島版があるが、もう少し「平和」に特化したものを作ることも一つの方策だと思う。

越智委員

広島大学は、平和を希求する精神を理念の第一に掲げており、このような大学は世界を見渡しても類を見ないと思う。学長としてやはり、平和を訴え続けるということが非常に重要だと思っている。

こうした取組は一度途切れると、また興すことは難しく、だからこそ続けていくしかない。そのためには、まずは「知る」こと、そして自分自身が平和について思索し、価値観の異なる人と対話して、最終的にアクションを起こす、といった過程が重要だと思っている。広島大学のアクションとしては、今年で６回目となる平和学長会議の開催を予定している。世界各国の学長に来てもらい、議論を重ねる。資料館やモニュメントを見てもらい、８月６日の平和記念式典にも参列してもらい、そして考えてもらう。同時に、世界中の学生にも、ピーススタディツアーとして、昨年は 130 人を超える学生に来てもらい、広島大学や広島市立大学の学生と、多角的な視点から平和についての学びを深めていく取組を行っている。また、福島へは、内科や救急科の医師を派遣する支援を継続的に行っている。

これまでの話の中で特に思ったのが、「街の活性化」は、広島の「平和」に深く結びついているという点である。しかし、先ほどのビデオにもあったように、資料館がすごく混雑しているので、もう一棟新たに展示館を作り、回遊してもらえばよいと思う。1971 年に私が見た資料館は、非常にメッセージ性が強く激烈だった。もう少しリアリティに近い展示内容の資料館を作り、まずは従来の資料館を見てから、その上で新しい資料館を見るという順路にするのが良いかもしれない。

また、岡畠委員が言われたように、私も復興を強く訴えていくべきだと思う。中東の学長は、広島のレジリエンスに強い興味を示していたので、復興の歴史や過程に関する展示もあればいいと思う。

最後、各論として、もう少し英語の書籍も増やしていいのではと思う。広島大学出身の堀川 惠子さんによる「チンチン電車と女学生」の英訳版や岡田英次さん主演の「ヒロシマ・モナムール」という映画など国際的なレベルの作品を活用し、積極的に世界に発信する、という方法もあると思う。

久保委員

私は原爆ドームから東に 150m のところで生まれた。私の家は、戦前は刀剣屋で、宇品から出兵する皆さんに軍刀を作っていた。８月５日に原爆ドームから慰霊碑まで母とよく歩いていたが、母から「職人さんは全部亡くなってしまった。そして親戚、家族も亡くなってしまった。そういう犠牲の中であなたが今いるんだよ。今の広島があるんだよ。だから、『平和の心』を持ちなさい。」とよく言ってくれた。

私が物心ついた時は、そういう鎮魂と、ちょうど広島カープや広島市民球場での賑わいがあったので、私は、平和とは賑やかで明るいものだと常に思っていた。こうした思いから、カープが駅前に移った時、なんとかあの場所で、再度、サッカーを通して賑わいができないだろうか、ということで、松井市長とタッグを組みながら、今の「まちなかスタジアム」が実現できたので、非常に嬉しく思う。今では、ゲートパークなどがあるが、当時は、橋の下にも家があり、また本川沿いに廃品回収する場

所、そしてバラックもすごく多い地域であった。その住民がアパートに移り、ピースウイングができた。ピースウイングにはミュージアムがあるので、復興というキーワードで、今のエリアが、どのように復興したのか再現してみたい。我々としてできることからやっていこうと思っている。

また、私もよく歩く平和記念公園には、例えば、資料館南に、母が子ども 2 人を抱いて戦禍を行くという涙が出るような銅像がある。しかし広島に来るどれだけの人が見てくれているのかと思うし、パンフレットなどで示し、見てもらい循環してもらえるようにできないかなと思っている。私の父は被爆して宇品の陸軍病院までリアカーで連れていってもらったと聞いているが、当時の戦禍の中で、様々な人が助け合ったことが分かるものが、平和記念公園を始め、色々あるので、是非、皆さんに循環して見てもらいたい。

最後に、平和を発信するという意味で名付けたピースウイングを通して、平和に対する色んな思い、「平和の心」を持てるような活動を、これからもどんどんやっていきたいと思っているし、まずは復興というキーワードで、ミュージアムを少し変えていきたいと思っている。

前田委員

私は、広島で生まれ育ち、平和を希求する広島大学に勤め、その後、放射線影響研究所の勤務を経て、現在は平和研究、平和教育を行う広島市立大学にいるが、こうした広島の平和教育と平和研究に関わってきた立場で述べる。

今回の平和文化のまちづくりを考える中で、観光振興はもちろんだが、その観光振興を支える環境整備について目を向けたい。先ほど来、情報が共有されない、様々な平和文化資産が点在している、資料館も個々に整備されているということがあるが、それら全てを統合的に捉えるようなデジタル基盤が必要ではないかと思う。また、交通アクセスや宿泊などが、単に予約システムがあるという話ではなく、有機的に繋がった情報提供ができるということが必要ではないかと思う。

次に、平和を学びに広島観光に来る方が多いことを考えると、やはり平和に関するコンテンツとして、先ほどお話しがあったような普段目に触れない遺産なども含め、「こんなところもあるのか。」という情報も集め、デジタルコンテンツとして提供し、平和学習の事前学習や、海外の方が来られる前の情報収集に使ってもらえるようにすることが必要だと思う。

次に、この観光振興された広島を支える人を、もっと増やしたいと思う。今、広島からどんどん人が出ていく中ではあるが、これからの広島の発展を支えることは当然観光振興につながるし、それにより広島で働きたいと思える街になればと思う。そういう意味で、観光振興を支える環境整備や人、インフラについて、さらに考えていく必要があると思う。

最後に、これからの若い人たちが「広島がこんなに良くなっている。こんな良い街なんだ。これからも明るい未来がある。」と思えるような街にならなければいけないと思う。それには、復興から今があるといった一連の流れの中で、若い人たちが「広島には、もっと明るい未来がある」ともっと思ってくれる街にならないと、なかなか広島に来てくれないし、広島の意義が伝えられない。その意味で、難しい面はあるが、復興を伝えることにしっかり力を入れて進めていければいいなと思う。

松藤委員

商工会議所が行っている、平和学習、修学旅行の受入れなどの様々な活動に関して、3 点述べる。

まず 1 点目は、平和学習の環境整備について。本会議所では、広域連携により地域の活性化を図るため、広島市はじめ広島・山口県内の 8 つの市町とともに、教育民泊を中心とする体験型の修学旅行の誘致、受入れに取り組んでいる。修学旅行生が広島で平和学習をするとともに、農山漁村の一般家庭に宿泊して生活体験や自然体験など様々な体験をしてもらっているが、こうした修学旅行生の受入れのためには、資料館の学習環境を一層整えてもらうことが重要だと思う。先ほどの映像にもあるとおり、資料館では、海外からの観光客の増加もあり、大変な混雑が生じている。その対策として、予約制の導入、開館時間の延長などに取り組んでおられるが、夜間の開放、レイアウトの変更、順路の明示など、混雑解消に取り組み、修学旅行生やインバウンドの方にしっかり見ていただける環境を整備していかなければならない。

2 点目は、修学旅行の受入体制の整備について。本会議所では、教育民泊の受入など体験型修学旅行の誘致を、関西圏や首都圏の旅行会社に行っている中、広島市内や宮島では、混雑のためホテルや旅館の確保が難しく、一方で長崎の方が確保しやすいため、平和学習を目的とした修学旅行では、九州方面を提案することもあるようだ。広島市では、広島広域都市圏協議会を設立し、広域連携のネットワークを構築しているため、広島市内や宮島以外の余裕がある宿泊施設を紹介する仕組みや被爆体験講話やガイドなどの様々なニーズに一元的に対応できる窓口を設置し、受入体制を整えていくことも平和学習を目的とする修学旅行誘致に効果的ではないかと考える。

最後 3 点目は、復興について。本会議所では、被爆から復興に関する取組として、広島経済界の 16 企業に参画してもらい、広島復興の歩みを伝える「プライド・オブ・ヒロシマ」の常設展示を行っている。これは広島の産業界が、被爆の惨禍からどのように立ち直り、復興を支えてきたかについて、ゲートパーク広島で展示しているものである。今日、世界中で戦火が絶えない状況であるが、いずれ戦争が終結した際、広島の復興の姿は、必ず大きなメッセージとして、勇気、諦めない心を伝え

ていくことになると思う。先ほどの西尾委員から話があった VR コンテンツなど含め、色々な広がりもあると思うし、佐々木委員の提言された「ディスカバリートレイル」といった位置づけの中で「プライド・オブ・ヒロシマ」も整えることができれば、多くの人に、見事に復興した広島からのメッセージが発信できると思う。広島市内には、被爆建物として、原爆ドームのほかにも、旧日本銀行の広島支店、福屋百貨店、広島アンデルセンなど多数の施設があるため、例えばライトアップなど魅力ある夜の景観づくりや回遊性の向上により、宿泊にもつながり、復興した広島の街をより深く印象づける取組にもなると思う。

箕輪委員

私は広島とは縁もゆかりもない立場だったが、広島に 12 年間住んで感じたことは、広島には日常生活の中に原爆があるということだった。街を歩き、ちょうど広電の猿猴橋駅の近くの路上に、造花で飾られた古いポンプがあり、「被爆ポンプ」とあった。それを見た時に、「ああ、あの時、ここに水を求めた多くの人が群がったんだ。」と。広島の街は歩いて、肌で感じることができる。私が提唱しているのは「広島の地べたに立って考えてもらう。」ということ。そのために、どのように人を呼ぶか、ということだと思う。

私は茨城県出身で、修学旅行で広島に来ず、岡山に行った後、四国へ行った。今思うと、「うちの高校ってちょっとあったのかな。」と思った。「ちょっとあった。」というのは、政治的なものに対して嫌悪感を持つということ。そうした地域で育ってきたから、平和という言葉に純粋さと不純さと両方見てしまう。広島に来て、資料館に足を運んだ時感じたことは、政治的なニオイが無いということ。答えとして、先日教えてもらったのが、財団法人広島平和文化センター設立趣意書のこと。「いうまでもなく、この財団は、ヒロシマの体験を根底にすえて、全人類的な視野に立ち、政党、政派を超越するものであって、偏った思想や主張を目的とするものではない。ひとえにヒロシマの使命に奉仕することによって、世界の平和と人類の福祉に寄与しようとする平和文化推進機関である。」と。

なるほどと思い、その後、長崎とか沖縄の同様の施設を見てみたが、ホームページを見ても簡単に見つからない。今、沖縄での平和学習の事件で「平和学習が萎縮する」と言われている中で、堂々と書いてあるということは、広島では政治的中立性が担保されており、学校現場として安心して子どもたちを寄こすことができると思うし、広島はもっとアピールしてもいいと思う。ある新聞であったが、文部科学省が小中高での平和学習について調査するとあったが、そんなことするともっと萎縮する。でも「広島に来ればそういうことはない。」、「まず資料館に来てください。街を歩いてください。広島の地べたに立って考えてください。」ということを、もっと言っていく必要がある。

椋田委員

二十歳の時、広島から東京そして沖縄に行って、あることを言われた。「広島の人は『原爆の後、草木が 75 年生えん。』と言ってるが、『広島のもんが通った後は草木も生えん。』と言われとるのを知っとるか。」と。また、「『被爆、原爆』と大騒ぎするけれども、広島の人は、成功したら、すぐ必ず広島に持って帰る。だから広島の人は嫌い。」と言われた。今、考えれば、広島の人は郷土愛が強すぎるから、広島に持って帰り、成功をみんなに共有したいんだと思う。沖縄では「広島の人は原爆ばかり言うが、地上戦とかヒメユリの塔とか考えたことあるか。あんたら、広島のことばっかり言う。」と言われた。確かに、僕らは生まれた時から、ずっと親から聞いていた。8 月 6 日の夕方、呉線の電車でゴロゴロ寝ていた怪我人のこと、きのこ雲を見て「何があったんじゃろうか。」といった話。広島で育ったから「8 月 6 日」、「8 時 15 分」が何を意味するか皆が分かると思っていたが、よそに行けば全然知られていない。「広島は特殊なんかなあ。」という感じで育ったが、そうした中、被爆 80 年を契機に、若い人がどんどん平和を知ろうとしてくれていることを知り、「いいことだ。」と感じている。そして、今だからこそ、平和文化都市広島を PR していかなければいけない責務があると思う。

広島電鉄で聞いたこととして「被爆後 3 日目には、一部であるが電車を走らせた。もちろんお金をもらえる人はおらんかった。でも電停じゃなくても人がおれば乗せるんで。」と。運転した運転手が定年で辞める時話してくれた。試運転で被爆後の己斐橋を渡る時、5、6 回、電車を停めながら進んだと聞き、「よく試運転の業務を引き受けたな。」と言ったら、「しょうがない。僕以外で元気な奴はおらんかった。あとは怪我人と年寄りですから。」と。現役の時には聞けなかった話ではあったが、彼は「言う気はなかったが、仕事を辞めるとなると、そのことを知っとってもらいたくって。」と。続けて、車掌をしていた人も「友達がみんな怪我しとる中で、私がやらなきゃいけんと思って、乗りました。本当に、もうとにかく、電車の中、何にも言わんお客さんだらけ。ただ、降りる時は『ありがとう。』って言ってくれた。」と。

こうした中で思うのは、広島で平和教育は大事だとは思うが、こうした広島の良さは意外と知られていないと思う。よそから来た人から「広島はこんなに綺麗な街になってる。どうやって、こういう街になったんですか。」とよく聞かれる。「広島が被爆の惨状からここまで復興したのはなんの力だったんだろうか。」と思った時、私どもが当時、 3 日後に一部の電車を動かせたのは、中国電力が電気をすぐ起こしてくれた、そして、材料が無く、電柱も無い中で色んな人が助けてくれた。さらに、広島の人はすごく悲惨な目に遭ったから、みんなで「負けちゃいけん。頑張らにゃいけん。」と心が一つになった、こうした状況に追い込まれていたと思う。我々は、こうしたことを勉強しなければいけない。

また、被爆後の広島の街の復興と併せて、被爆前はこんな街だったということを勉強しなければいけない。昔は、西国街道で、大阪から西は博多の方まで通っていたが、今の歴史の中で、ほとんど西国街道の話が出てこない。そうした広島の良いところ、歴史、復興の力、なぜみんなが一体となれた

のかと。戦後、市民球場を作るまで、二葉会はすごく結束が強かった。そしてある程度、元気になったらバラバラになり結束が弱くなった。そういうことを考えたら、今一度、広島復興でなされた一体化した力というものを思い出してみるべきだと思う。

市長がいう循環型の都市であれば、途中で広島の街に被爆などの案内板やゆっくり休憩できる場所が必要であるし、さらに、平和公園、平和大通り、そしてまた川沿いの通りなど、安全に安心して歩けるような街に整備しないといけない。広島で夜まで楽しんでもらったり、楽しんでもらう雰囲気づくりは、もっと考えなければならない。

八幡委員

今日は、私が被爆体験証言者として日頃思っている 3 つのことを述べる。

まず 1 つ目は、私たちはこれから何を伝えていくことが必要かということ。8 歳の時の被爆直後は、惨状に言葉も感情も失くし、食糧難による飢え、さらに友達も亡くし、悲しい体験をたくさんした。こうした中でも、戦前の懐かしい思い出は、今も消えない。川遊びの中、全身で喜びを表している子ども、この子どもにカメラを向けてシャッターを押した人、こうした方々も一瞬のうちに原爆の犠牲になった。こんなあどけない子どもたちの未来を奪った原爆を思うと、この写真を見るたびに涙があふれる。こうした犠牲になった子どもたちの戦前の姿を是非残すために、戦前の街並み・生活や子どもたちのあどけない姿や遊びの展示を戦前のコーナーとして充実していただきたい。

また、被爆体験証言の後、外国の方々からよく復興に関して聞かれ、被爆直後のインフラや交通の復興の話をすると、「そんなに早く？」とどよめくくらい驚かれるが、復興に関する展示の部屋も作ってほしい。広島の方々の熱意、希望を見出して一所懸命一丸となって頑張ってきた大人たち、そうした歴史も伝えたいと思う。世界を見ると、築かれた街が戦争で崩されていく、こうした姿を見るたびに、本当に人間の愚かさを感じる。復興には一つ一つ大変な努力が必要なのに、あっという間に街を瓦礫にしていく今の国際情勢を見る度、何か広島と重なるものがあって耐えられない思いがする。

2 つ目は、せっかく広島を訪れた外国の方々が、資料館の混雑でなかなか見学できなかった話を聞く。先ほどの映像でもあったように、原爆の様々な実相を学ぶにはあまりにも混雑しており、せっかくの旅行が台無しになったという話も聞く。こうしたことを踏まえ、資料館の展示空間を広げていただくことを提案する。国際会議場に行く度に「こんないい建物があるのに、どうしてここに資料館の展示を広げないのかしら。」と思う。本館、東館、会議場はつながっているため、国際会議場を是非、資料館にしてほしい。本館と東館と西館という形で色々な展示ができると思うし、来られた方の憩い

の場にもしてほしい。例えば、照りつける真夏の暑い季節や凍てつく冬も、外のベンチで鈴なりになって休んでいる人を見る。こうした方々が国際会議場 3 階の窓から、平和公園全体を見回すことができる、くつろぎの場、憩いの場、祈りの場として整備いただけたらと思う。

3 点目は、平和公園は憩いの場にもかかわらず、資料館南側に多く駐車している大型バスのこと。慰霊の場、歴史の重みを感じる場にふさわしくないし、違和感を持っている。また、突然バスがバックして危険を感じたり、バスとバスの間を縫って道路に出ることもある。私からの提言は、大型バスの乗降や駐車の場所を他に移し、そこから資料館までの間に素晴らしい平和の道、緑豊かな道を作ってもらい、広島の街を回遊しながら資料館に来てもらいたいということ。今のように、バスから降りて見学をし、また慌ててバスに飛び乗って帰るのではなく、もっとゆとりを持って広島の空気や風、自然を感じてもらい、広島の人たちの佇まいなども見てもらいたい。ここは慰霊の場で、遠くから見ると東西に建物があり、真ん中に本館があり、そして記念碑があり、そこで原爆ドームが見える。まさに祭壇のような場であるから、バスの乗降を他に移してほしい。

最後に、いつも私は、来られた方々に、「この広い地球に生まれ合わせた私たちは、同じ世代を生きる家族ですよね。」と話す。こうした人たちの未来に、二度と同じことが起きないように願いながら、被爆の実相、体験を伝え、そして復興の話もする。そうした大切なものを展示する部屋をもっと広くとってもらい、詳しく皆さまに見てもらうことが私の願い。世界の広島、平和の発信地として、素晴らしい街になるよう是非よろしくお願いしたい。

松井座長

佐々木委員が提言されたエコミュージアムとナラティブをうまく取り込んだ街づくりの枠組みの中に、委員の皆さまからの様々な意見をうまくはめ込めるのではないか、と思って聞いていた。エコミュージアムの考え方は 1960 年に生まれたとのことだが、実は、1949 年に成立した広島平和記念都市建設法の草案を作った参議院議事部長をされた寺光忠（てらみつ　ただし）さんが、この法律で目指した恒久の平和を願う日本国民の理想の象徴として恥ずかしくない都市像を、次のように表現している。「足をひとたび広島市に踏み込めば、その一木一草（いちもくいっそう）が恒久の平和を象徴して立っている。石ころの一つ一つまでもが、世界平和を象徴してころがっている。平和都市の名にふさわしい国際平和の香気（こうき）が全ヒロシマの空に満ちている。」と。寺光さんのこうしたイメージは、概念的にはエコミュージアムの種になるものでは、と思いながら聞いていた。この考え方をしっかりと広島のまちづくりに活かしたいと思う。

ナラティブは「物語」と言えると思う。人間は、結局、全てのものを集約して物語にし、自らの物語と他人の語る物語を自分の頭の中で比較しながら、それによって感動したり激怒したり、泣くなどの感情を引き起こす。パーツパーツを比べても、感情は何も湧かない。感情を引き起こす時、必ず物語があるし、この物語性を大事にしたいと思っている。

本日の話を聞いて思ったことは、「被爆」がもたらす、命すら失いかねない大変な状況を知った上で、今の街の姿を見てもらい「こんなにもきれいな街になるんだ。」と比較しながら、自分事として色々な物語を作るのだろうと。すなわち、広島の地で、戦争・原爆の被害と平和の物語を比較し、感動していただくことで、自分たちも悲惨な目に遭わないよう平和を追求しよう、と深く考えてもらえるのではと思う。また、被爆して散々な目に遭い、街の誕生以来紡いできた物語は一気に無くなり、新たな形で今に至るという一連の物語を自分なりに作り上げるから、感動してもらえるんだと思う。

そう考えると、ますますもって、誕生して以降の広島の物語を街の中で体験してもらう施設、被爆樹木、被爆建物、平和記念公園、平和大通り、平和の丘など、色々なものをうまくアレンジし、来広した皆さんがゆっくりとゆったりと見て歩ける、夜でも見たくなる、と実感できるようなまちづくりを目指したいと思った。

最後、バスについて、市内で停める場所が無い中修学旅行生も来るため、仕方なく空いている場所として平和記念公園横の道なども、駐車場スペースとして相当に無理をしながら活用してきた。今後、商工会議所の建物が無くなり空間ができるため、そこに、賑わいや平和記念公園に来る方々の準備施設群を配置して、そこから公園等に歩いてきてもらう。平和記念公園やその周りは祈りの静謐な地として、賑わいなどと分離しながら、橋や川を越えてくるという街の構造にしたい。かつ、公共交通など色々なものを使って巡回してもらい、また歩きであれば平和の道、文化の道、西国街道などを整備し、さらに沿線の事業者等にもお願いして、場所々々で休めるようにしながら、ゆったりと市内を回遊してもらえる街を目指してはどうか思っている。

それでは、本日のとても貴重な意見も踏まえ、しっかりやっていこう、という決意表明をして、議事を終了する。頂いた意見は、次回の懇談会で示すこととする。